

教育改善 PDCA 進捗シート-02

課題名称	研究室配属方法 2009
起案者	教務委員（伊藤）

※原則として起案者が本シートを継続的に記録，学科ホームページに UP する。

課題の概要（改善すべきとする背景と目的）	
<p>2006 年に研究室仮配属を 3 年後期に実施する取り組みをはじめたが、仮配属後に留年が決まる学生が特定の研究室に偏り、仮配属時より学生が減ってしまう研究室が生じたため、そこで進級規定に抵触する学生を仮配属対象から外したが、それでも学生数が減ってしまう研究室、留年生の割合が多い研究室が生じた（2007-2008 年）。これらの事態に不満の声がありさらなる改善を行う。</p>	

Phase	議論・措置の内容	議論の経過（年月 委員会 等）	次回予定
P	<p>■成績順位の算出にあたり、単なる SABC の平均のみでなく、単位取得総数を考慮する算出方法に変更し、必要最低限ぎりぎりの単位取得ではなく、多くの開講科目を学ぶことを推奨する内容とした。</p>	2009 年 2 月（教室会議）	
	<p>■研究室仮配属時（3 年前期終了時）の学生の成績のうち、特に専門 A の取得状況に注目し、過去数年の学生を対象にして 3 年前期までの専門 A 取得状況とその後の進級・留年状況との関係を調査した。その結果、3 年前期終了時に専門 A を 4 科目落としていると、留年発生率が急激に高くなることがわかった。よって、専門 A 科目の D あるいは X 判定が 3 科目までの学生のみを仮配属対象者とした。</p>	<p>2009 年 6 月（教室会議） 2009 年 7 月（教室会議）</p>	
D	<p>■成績順位の算出にあたり、単なる SABC の平均のみでなく、総単位数も考慮して順位を算出した（計算プログラム修正）。</p> <p>■学習意識を高め、進級への適切な危機感を与える目的で単位取得と留年の関係性を学生に明示した。</p> <p>■専門 A 科目の D あるいは X 判定が 3 科</p>	<p>2009 年 9 月（教室会議） 2009 年 10 月（若井・伊藤・近藤） 2009 年 10 月（教室会議） 2009 年 10-11 月（3 年担任・教務委員）</p>	2009 年 10 月

	目までの学生のみを仮配属対象者として研究室仮配属を実施した。		
C	<p>■ 確認事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仮配属は本配属を見越したものであり、3年後期から全員が仮配属する。 ・ 休学中の学生も仮配属する。 	2009年11月（教室会議）	2009年11月
A	<p>■ 研究室配属方法に基づいて本配属を実施した。学生数の研究室格差は是正された。</p> <p>■ 思いがけない効果として、この研究室配属方法により、3年前期終了時に各学生は自身の専門Aの取得状況をよく確認することになった。専門AのD/Xが3科目以下の学生はそれ以上増やさないように、あるいはまたそれを減らせるように3年後期で努力して進級する。専門AのD/Xが3科目より多いために仮配属できなかった学生は、このままでは進級できないということ強く意識するためか、3年後期で専門AのD/Xを3科目以下にして進級する。進級ギリギリの学生の進級率が上昇したように思われる。良い効果である。</p> <p>留年生の配属が集中する課題については別WGで検討することとした。</p>	2010年4月（教室会議）	2010年4月 【WG完了】